審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

経済発展やグローバル化の進行に伴う物的・人的資源の急激な変化・流動は，地域社会や家族のあり方の変容をもたらしており、そこで生きる若者の社会的価値の内面化に大きな影響を与えている。本研究は、社会的変化や発達的変化による青年期の不安定さから生じる諸困難を「生きづらさ」として捉え，現代社会を生きる青年たちが自己形成過程でどのような「生きづらさ」を抱え，それをどう克服していくか，健全な自己形成を促すためにどのような支援が必要とされているかという問いについて、「生きづらさ」を概念的枠組みとして 分析・検討した研究である。

現代社会を生きる若者たちが自己形成過程で抱える「生きづらさ」は，消費社会を特徴とした先進国の若者たちのなかで顕著にみられる現象であり、日本も例外ではない。しかし、国や地域に限らず、近代化・都市化を推進する開発途上にある国々においても、先進国の若者問題と類似した現象が現れていると考えられるが、これまで西欧諸国を対象とした研究が主であり、それら以外の国々、地域を対象とした研究は進んでいないのが現状である。

現代青年の自己形成過程の共通性、多様性を検証する上で、複眼的な視点を持つことが重要であり、今後の研究においては不可欠な視点である。本研究はその視点から新たな課題に果敢に取り組んだ研究であり、その意義は大きい。

加えて、個人の「生きづらさ」の規定要因を発達的、歴史的、社会文化的観点から包括的に分析・解明を試みており、本研究のアプローチは独創性があり、国際比較研究の観点からみても示唆する点が多々あり評価に値する。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究は、理論研究と実証研究の手法を用いている。理論研究においては、まずこれまで様々な領域で論じられてきた「生きづらさ」に関する先行研究を総括し、本研究での自身の研究における操作的定義を明確にしている。加えて、これら理論研究においては、社会文化的、発達的観点から「生きづらさ」の文脈をとらえ、「生きづらさ」を規定する要因についての理論分析がなされている。次に、理論研究から導き出されたリサーチクエスチョンをもとに、質問紙調査による実証研究を行い、理論研究から導きだされた課題の考察を行っている。

これら一連の方法は仮説検証型であるが、心理学研究においては妥当な方法であると判断している。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

理論研究においては、医療・福祉領域、教育、家族研究、社会経済、ジェンダー研究等、「生きづらさ」に関して広範囲な資料を取り上げており、また研究対象も従来の障碍構造論の枠を超えて社会的・性的マイノリティ、子ども・若者、さらに一般の人々にかかわる資料を取り上げ分析している。実証研究においても、実態調査を基本とした予備的調査から本調査に至るまで、研究目的との整合性を保ちつつデータ収集、分析を行っており、資料・データ収集、分析

は適切である。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

本研究では青年期の若者が経験する「生きづらさ」の背景にある社会的価値の内面化と自己実現のミスマッチによる社会化の困難の規定要因および要因間の関係を分析、考察し、それらの関係の構図を明らかにしている。それら一連の過程では、社会背景から読み解いた社会構造・文化的視点、個人の内面から読み解いた個人・発達的視点から包括的な考察を行っているが、分析から導き出された考察、それに基づく結論には整合性があり、考察と結論は妥当と判断した。本研究ではまた、これまで対象となってきた日本の青年を含めた先進国だけでなく、歴史的・文化的背景が異なる中国の青年の自己形成過程で生じる「生きづらさ」の様相の相違を明らかにしており、その点においても新たな視点から結論を導き出している。本研究の結論は、比較文化的観点からの研究に新たな視点を提供するものであり、導き出された結論は学術的な水準に達していると判断した。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究は，新しい課題に果敢に取り組んだ成果であり，その成果はこれまで提唱されてきた現代青年の自己形成過程に異なる可能性への展望を提供できると考えている。

今後につなげる萌芽的研究として評価できるものであり、審査委員は全員一致で博士（教育学）の学位授与に相応しいと判断した。